

慶安の御触書は後世の創作だったの？

「慶安の御触書」は、江戸幕府が1649年に発布した触書とされています。これまで、幕府の農民政策の基本理念や政策内容を理解するために、この触書で示された家庭生活の規制の具体的な指示の例や、「年貢さへすまし候えば、百姓ほど心易きものはこれ無く、よくよく此の趣を心がけ、子々孫々迄申し伝へ、能く身持をかせぎ申すべきものなり」の一文が使われてきました。しかし近年の研究によって、この触書は、1830年代に編まれた『徳川実紀』引用の『条例拾遺』のみの収録で、触書の古い写本も見当たらないことから、「慶安の御触書」は実際に発布されたものではなく、17世紀半ば甲州から信州にかけて流布していた『百姓身持之事』などを基に後世に作成されたものではないかといわれてきています。このため「慶安の御触書」は、幕府の農民政策の理解として扱うよりも、為政者からみた農民観の理解として取り扱うべきでしょう。

江戸のリサイクルから学ぶことって何？

江戸は、18世紀には、100万人が生活した大都市でした。また、当時は「鎖国」のため、現代のように、資源を海外から輸入することもできませんでした。そのため、国内の資源を無駄のないように再利用しながら有効に使い、都市の生活を営む必要がありました。ここから、江戸時代はリサイクル社会となったといわれています。たとえば、江戸では大量の糞尿が発生しましたが、これは優良な肥料として周辺の村々に買い取られ、この下肥しもごんを使って農作物が生産され、市中で販売されました。また、古鉄買ふるがねかいや紙屑買などの業者が、鉄や紙を回収し、鉄は再利用され、紙は漉きなおされて再生紙として使用しました。ほかにも、雪駄せった、錠前、提灯など多くの生活道具の修理屋がいて、道具は何度も修理して使用しました。このように、江戸時代には、資源を無駄にせず、ごみを出さない社会構造がありました。この社会全体の構造を把握したうえで、現在の日本、地球全体にまで広げて、循環型社会を考えることはできないでしょうか。